



仇詒七部集

何遜書

六

14
3157
23(6)



14
3157
23
(6)



荒野集卷之六

雑

年中行夏内十二句

供屠藕白散

荷今

いさひなやととあまのりる人比身

春日祭

やーるいなるたのまはははは

石清水臨時祭

下

沓音もきつゝかきつゝのり

灌佛

まゆらひやいへんはあはれ

端午

おもひつゝ夢付るは髪を洗

施米

うちめくちと次米そ虫臭そ

七巧費



ワの葉とらと七夕草そま

駒迎

爪板も猿のすゝむを留む

撰虫

まのれや豆のおかしき

裡木

十月更衣

ましと糸衣そくちりるむ

五篇

舞姫に采玉指をたづなり

追難

木を縛りや腸よとつと鬼お面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

水ぬし流り流るはまの風

白片落梅浮胸水

水多おたへに付は梅白し

春來無伴胸遊少

花賣よあそびたのあそび隣り

花下忘帰因美景

寂入なげもの川をせむのり

留春春不留春歸人

寂寞

いまもこゝへ入るの野もい

巖風吹袂衣

不寒復不熱

後脫を松の葉にすくひて

池晚蓮芳謝

蓮の葉もしほの志ももよほ

暑月貧家何処有客

來唯贈北窓風

涼をとりし切ぬとよかり水のあそ

大座四時心惣苦就中断腸是秋天

坐の座をゆつとせり秋の心

夜來風雨後秋気飒然新

秋の氣をゆつとせり秋の心

鐘之鐘漏初夜長

取之星河欲曙天

鐘の音をゆつとせり初夜長

残照燈帛猶斜光月穿牙牖

獨り坐や流るる白く又あまの月

万物秋霜能懐色

白くもやまをたつるを秋の露

十月江南天气好

可憐冬景似春美

こがししをきく息つく山をた

寂寞深村夜残雪中庭

静かきと出るとぬむや雪のうら

白頭夜礼佛名経

佛の礼之腰懐く白髪外

後何れも懐ひのうらむはと

こがししをきく息つく山をた

銚鏑目立 舟泉

かき紙子の夕月やしらむさつふ

付木実

五月園の鶉をみる人のあ

鉤瓶縄打

かへるはやほのこころは秋の星

糊賣

あまののこころは秋の星

馬糞橙

こがししの松をみる人のあ

李夫人

越人

現在何許香煙引到焚處

かけぬきの抱はるる人のあ

揚貴妃

雲整半偏新睡覺花

冠不整下堂

さるる風をみる人のあ

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛黑

默眉々細長外人不見々應笑

その美しきあやしののまの終なりん

西施西施は千載後胡蠻也

官中拾得娥眉芥不獻吾

君是愛君

是なるのく極く牡丹の那

王照君

美人

王貌風沙滕畫圖

このまよもまよとぬまの柳小

一目留主をくするの侍

卯

釣雪

疾也の牧也佐佛供穢火おろり

辰

杜若生ん繪書紙来るはや

己

釋乃腹

午

乃而ひと

未

蟬乃喜之武家終多食

甲

五月而也

一

是形

凶

廉留乃上

野鳥

鴨突

星虫

枝あり虫より

下

海鼻

おあしるを鋸引きと金魚の月 全

川鼻

杖の昏鴉川くの火ぬきと 合帖

牛馬置是謂天落馬首穿午

鼻是謂人

一方を柄はく枕結継才の部 越人

藏舟於壑懸凶於澤謂之謂也

周然而夜半有々刀者負

之而走

かゝりし原走の市にらるるこい

絶聖棄知大盜乃止

七夕をゆりすことなることし

鏡者久

そぬくく流るるものちをゆり 桂夕

中々残る鬼獄さあよゆきよなる
合昭

閑あそびくうまじきあふりささく
宗祇
法師

美濃國岡崎のふしのころ

あまのこころを
あまのこころ

等野あそび布子着た衣更衣
杜國

夏うつやゆめあそび志願の
童五

五月雨くかたぬぬのや雨回橋
芭蕉

湖乃あつ浦よりきか来
去來

牛もほしき月のあつりおひ月雨
一髪

角回川

いのはは秋の能合ひく
貞室

みーのうつく秋の貝の音
破笠

いさむとほこきしなの秋
芭蕉

夕月也杖くあなめる角回川
越人

九月十三日

角くましく富士あそびくあのみは
素堂

榻吸星を脱くく通るなり 夕杣

日の入や舟をえくり杣の心 一髪

のさくーや瀑の音おしきさうな 荷兮

出の脱く後におひぬ衣く 芭蕉

あまの候別く 松

おもくく吹あまの松くく笑やり 除凡

疾くくぬく食糧のゆるゆるの也も記 冬松

段をくくくくくくくくくくくく 昌碧

五月雨や桂月をおす市松家 松芳

夕らにとの夕名く一志はあや 傘下

芭蕉くくくくくくくくくくくく 松

稲妻あにさくくくくくくくくく 釣雪

なきくくくくくくくくくくくく 一井

あま風くくくくくくくくくくく 野水

おひくくくくくくくくくくくく 舟泉

き方ちゆくくくくくくくくくくく 嵐弾

ちりしなほいんてむむく

又級乃月さこ人こらそ秋なり 荷今

越人移るるやいそいそ

月にし服をんつそ馬乃うへ 野水

たそ秋のなかりつそ本曾秋 芭蕉

知乃昌あはそ秋のつそ 路通

物貯桶とらあ其角れそ

ねそねそ

物貯桶に麻をかつそ秋の心 荷今

とあゆみ 稲をそあそ ちひ

入月こそ志ゆしそあそ 去寮

解そゆそ秋あそあそ 一井

石川まそ人まそ

澤菴乃墓をり秋のそ 文鱗

草枕あそ秋しそあそ 芭蕉

藤あゆみ乃うそあ村し秋 常秀

律山馬

芭蕉のくさくさ
荷今
野水

其角のついで

荷今
越人
傘下
宗因

越人のきき

芭蕉
同

迷憶

舟一舟をたて

路通
伎宣
落梧

も野もて

あまふたふさるるり奥の院 杜園

梅もくくしあしうさるる食は 梅吉

高野もて

父あのをささうにさす 雛子の色 芭蕉

あやささす朝もくさるるのついでに 荷号

さしふ入湯をもくひらり 一段血 同

ふかめなすしああさるる伝おのり 杏雨

月夜をさるるあまうしゆもやの夏 秋風

何ぞしや白髪友こかつく 麻舟賣 亀洞

九月十日まふさるるのさうし

かくれあやうさるる中まある 嵐雪

のさるるをさるるまうくの地橋の那 脱履

人のさるるまうのさるる

さるるさるるあゆむるさるるのさるる 芭蕉

何里の人もさるるのさるる

二か〜の〜
社園

鐘倉建長寺よきつて

〜
越人

あゝ人の心をかりんやと

〜

あゝ神なほあゝ獲や〜
荷兮

ちの〜

〜
胤彈

松の火子 霧子足さ守 傳の作 去來

目や遠く 身やちの〜 西武

物もともや 臍の珠は 芭蕉

はあ〜のさ〜をね〜 除風

老〜

〜
越人

意

伊勢

〜
一有妻

まぬくや余のよもも時多
除風

蚊をかくるのちやこころの那
長虹

むしに乃月こころをぬく
文淵

虫に小神こころをぬく
冬文

さくひめ 妹の垣のうらさなり
心棘

六宮粉黛無顔色

新月周の稲妻の雨あや月の影
長虹

こころをぬく人 体のおかをぬく
尚白

まじりまがよ

しんあまのあまやうゆ 如もた
荷手

まじりあまのあまやうゆ 小まよ
小春

妻の氣おあまのあまやうゆ 越人
越人

松の半時ゆ 旅のこころをぬく
俊似

おおもひの火燧をぬく
舟泉

うらぬく火燧をぬく
嵐集

山廻りものこころをぬく
松芳

三ぬ〜
冬松

ねらう〜
昌碧

ぬぬぬ〜
泉

ぬぬぬ〜
野々

ぬぬぬ〜
守武

ぬぬぬ〜
小春

ぬぬぬ〜
傘下

未期人

ぬぬぬ〜
兄順

ぬぬぬ〜

ぬぬぬ〜

楢乃〜
荷今

ぬぬぬ〜

ぬぬぬ〜
京
去來

ぬぬぬ〜

ぬぬぬ〜
荷今

世にやまをく妻の女はうりつら

水ぎ月の相のくまやうらへし 野水

辞也

あもゆや灯籠一川に主コ舟

子こそまじりたるは

何れ親のあつてもゆくりん一確り 落梧

一原野ふり

おのゝのあや小町おひのたのめ 釣雪

妻の趣善なり

なまのへし志その里人うたのむ 自悦

季下ろ妻乃こまうりしを

いかに

ゆりゆりやかへひえゆへおら 去來

コニキみちりし後

その人さう斬るくぬし秋の流 其角

あんなにたのむるもなれんまはた

松風子や留り合々ふ秋の言 尚白

ある人の追善

煙火をさゆやなみこの意をもも 芭蕉

旅よてみまうりま向入る也

あハ宵をたさう也うら子所なり 胤弾

まの野へうやま俳の多紙 加賀 小春

續集卷之八

釋教

伊勢

神垣也ねあ日らうひは涅槃像 芭蕉

負うまをむね流しむりねんを 胤弾

西行上人五百歳志

たけのこやしむの樹る梅の風 荷守

ねのこ 遠志

連翹やそゆと月や志はゆかりり 胡及

うき青く梅の葉くは二玉か 松茸

木履くく信りるきり雨乃花 松園

けりいひをさぬて勢くは花のき 冬松

花之酒信りも俺ん揚さこの坊 其角

貞享つら此居の歳は三月東照宮の別當
僧正の法房に慈恵大師近座執事法率
八講の侍に「さきさき」を授け徳貞とまうり
序品のころなり

夜花のころとむいしきり 越入

女房の徳字をさきくは兼平はたか徳とあり

あま龍女殿佛のあまかりて志のひあま

白鼻かひまきの

ほろりとあまのあまのあまの 同

親き青は尾上のさめくはよきり 俊似

古寺やほるとめひの莖草 一井

八雲のうら

あまのあまのあまのあまの 千園

仔細

あまのあまのあまのあまの 一井

復山や木陰くの江湖新屋 莖葉

女あらし

薩佛乃りりくはゆきふ麻の子は 芭蕉
薩佛のそひ清くはくはくは 尚白

さくはくはく

腰のあらしはれきさくはくは 一雪

糸くまて蒼つ日の清くはくは 加賀 一笑

十如具

おもしろくあつゆきく通る 荷兮

昂身昂佛

復隆乃りきく疾とちんの佛は 愚益

ほろひや僧の縁たると夜 崩彈

ねろくや門くくあつて施餓鬼棚 荷兮

おろきおちばとくはくはのまは 探丸

石籠く縁縁鬼の棚のくまは 文里

媿多舟くく酒をま向きり 亀洞

たまゆきと送ふまはくはくは 卜枝

松乃伝 釣雪

平ホ施一切

後似

荷守

ト枝

あつ人四時の景柳なりとて水鏡と

燕とを不食不園をいを感し

系とるをさうまを

荷守

あつもの舟の

其角

一井

ト枝

人のかたはあつもの舟の

嵐弾

鎌倉の西園論

越人

古寺の香

暎や伽藍の雪見廻ひ 荷今

同

雪ややうらと二玉より片腕 俊似

了りあきくこいされもきり仏 一井

知らあする人のこいさや神鼓 文陶

千觀の馬とかせりしひのり 其角

薬王品七句

如寒者得火

おの白くむきの後さるる 胡及

如裸者得衣

雪乃月内ほ移指ふあまけ家

如商人得主

双六乃あひるよひこむつら

如子得母

竹もくをけくえつくさけの肌

如後得船

月影比隣の板木さきより

如病得醫

かしくささいほのつと付あしきも

如暗得燈

秋のよもぢしゆもさしにささ

如天宮金母久

神祇

古もやるまゝのしる獅子頭

釣雪

二月廿五日もゆく

花さしきや廿四日の月影梅

荷今

きんしと梅さぬうる庭火分

同

ささしきあひくこく神の梅

亀洞

上下のさしぬやうく神の梅

昌碧

灯のかすくのなかり梅の中

釣雪

何れもわづらわのやとくまきり梅のむ 越人
 是くわくあふ梅をこころの梅 舟泉
 月代もまきもわとや梅の家 雨桐
 門あつて梅を隠離れまかり 重五
 繪馬も海人の及まるとめり 玄察
 若くまきと齒朶かきとくまき 鈍可
 宮乃後川後まきとまきとめり 李桃
 花の伎の本まきの中の中 好葉

花の伎の中の中をまきとめり 玄察
 まきとめりをわくまきとめり 亀洞
 破扇つまきとめりまきとめり 未学
 川原まきとめりまきとめり 荷今
 こかりしや星まきとめりまきとめり 尚白
 此月まきとめりまきとめり 松芳
 まきとめりや称直のまきとめり 落格

若宮奉納

三つとくぬまの毛妙也神々系 利重
 跡の方也く疾きやうすりおの跡系 野水
 乾麻川若明の跡々神系 昌碧
 かつとこの神とまこふとて庭火が 村俊
 橋杭や内枝ぐる媒とくひ 卜枝

祝

肩 休らういづくくちなりぬもまへ 冬文

荷字々四十乃まきん

炎毒も竹を修とこゆもか 重五
 君と代やとくくとも玉つとに 越人
 青苔も何海もと神仲の石 傘下
 いとくも満もた土と枝海の人 亀洞
 子役の秋にちひとま 同

きくか神おりてんくをさ

先程へ杓身らのみとて就て 芭蕉

